キズナエピソード

雪舟エリザ　5話

//とびお自室

//ヴィジュアルノベル形式開始

「謝ってくるまで許してあげないんだから！」

あの日、別れ際に言い放った言葉通り、

エリザは俺のことを許してはいないようだった。

その証拠に、あれから一度も俺はエリザと遊んでいない。

//次ページ

「『ごめんなさい』を言う気になったかしら？」

だが、エリザは事あるごとに俺に絡んできてはいた。

「アナタ、私に言いたいことがあるんじゃない？

　仕方ないわ。特別に許してあげるから、謝りなさい」

ときにはメールで。ときには電話で。

そしてついには、直接家まで訪ねてきた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//とびおの家

［エリザ］

「『ご』で始まって、『い』で終わる

6文字の言葉をしゃべるなら、今がチャンスよ？」

［とびお］

「五億欲しい」

［エリザ］

「現金という誠意をもって謝罪とする考えは良くないわ！

……じゃあ、『ご』で始まって、『ん』で終わる

3文字でもいいわよ？」

［とびお］

「五万」

［エリザ］

「要求金額がぐんと下がったわね！」

［とびお］

エリザはどうしても俺の方から謝ってほしいらしい。

だが、今回の件に関しては俺は全く悪くない。

謝るなら、エリザの方からだ。

［とびお］

そんなとき、突然スマホが着信した。

［エリザ］

「ちょっと！　私が話しているのに、電話に出る気？」

［とびお］

「……陽彩からだ」

［エリザ］

「え！？」

［とびお］

スマホの画面に表示されていた名前を読み上げた俺は、

エリザに見せつけるようにして電話に出た。

［とびお］

「もしもし、珍しいな。どうした？」

［陽彩］

「実は今、論文を書いている」

［とびお］

「論文？　優秀賞取ったのに、まだ書くのか？」

［陽彩］

「優秀賞を取ったせい。

今度は、海外の研究所に出すために、

新たな論文を書かないといけなくなった」

［とびお］

「そいつは大変だな……。

あれ？　それで、どうして俺に電話を？」

［陽彩］

「論文の途中で、難問にぶち当たったんだ。

コンピューターサイエンスの分野は

エリザの方が詳しいから、協力してほしい」

［とびお］

「……なるほど。

それで、だからなんで俺のところに電話するんだ？」

［陽彩］

「エリザと電話が繋がらなかった。

でも、きみのところにかければ

きっとエリザはいるから」

［とびお］

「ま、まぁ、たしかにエリザはここにいるけど……」

［エリザ］

「な、何！？　何の話してるの！？」

［とびお］

……しかたないか。

俺は陽彩の要請をエリザに話すことにした。

［エリザ］

「……ムムム！それってつまり……」

［エリザ］

「陽彩はワタクシチャンサマの力が必要！

そういうわけかしら！」

［エリザ］

「いいわ、陽彩。手伝ってあげる！

とびおもついてきなさい！」

［とびお］

「おい、ちょっと待て。なんで俺まで？」

［エリザ］

「わからないの？

私は今から、陽彩と共同執筆するの。

陽彩の家に缶詰するのよ」

［エリザ］

「でも、陽彩は一人暮らしなの。

そうなると、二人のご飯は誰が作るの？

アナタしかいないじゃない！」

［とびお］

「いやいやいやいや。

さも当然、って感じで何言ってんの？

そもそも、俺達ケンカしてたよな？」

［エリザ］

「ちょっと、アナタ正気？

駄々をこねるのはやめなさい。

論文執筆は一分一秒を争うのよ？」

［とびお］

「……謝ったら、ついていってやる」

［とびお］

今回ばかりは、厳しくしないといけない。

俺は頑なに謝罪を要求した。

［エリザ］

「はぁ、何よそれ!?　そんなに謝ってほしいの？

子供じゃあるまいし」

［とびお］

「お前も子供じゃないんだから、謝る時は謝れ」

［エリザ］

「うぐ……わかったわよ、謝ればいいんでしょ！

……ごめん。（超早口でぼそっと）

はい、これでいいわよね！　来なさい！」

［とびお］

ものすごく簡素ではあったが、

エリザにとっては、精一杯の謝罪だ。

そのことを俺はよくわかっている。

［とびお］

だから俺は、これ以上追求はせずに

エリザと仲直りしてやることにした。

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//道

「それにしても、陽彩はライバルじゃなかったのか？」

陽彩の家に向かう途中、俺はエリザに問いかけていた。

すると、エリザは「ちっちっちっ」と指を振る。

「もちろんライバルよ。だから協力するんじゃない。

　ライバルは恋人くらい得難いものなんだから」

//次ページ

「成長するのに、ライバルの存在は必要不可欠なのよ。

　ワタクシが切磋琢磨できるのは、陽彩のおかげなんだから」

意外な返事だった。

俺はてっきり、エリザは陽彩のことを

目の敵にしていると思っていた。

//次ページ

そんな疑問を口にすると、

「もちろんそうよ！

　いつか絶対負かしてやるんだから！」

と、まっすぐすぎる天真爛漫な笑顔が返ってきた。

俺は呆れながらも笑ってしまう。

//次ページ

「エリザは、相変わらずエリザだな」

「当たり前でしょう？

　ワタクシはいつだって、ワタクシチャンサマよ！」

さも当然と言った風に、エリザが語る。

屈託のないその笑顔に。

俺はときめきを覚えていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//5話終了